



民国だめんず・うお～か～ : 白薇の東京体験

濱田, 麻矢

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 50:1-25

(Issue Date)

2023

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481152>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481152>



民国だめんず・うおゝか——白薇の東京体験——

濱 田 麻 矢

はじめに

中国が自由恋愛を知ようになったあと、その輝かしさは繰り返して文学テキストに描かれるようになった。ではその影の面はどうだろうか。

本論では、大正期の東京で中国人留学生が体験した自由恋愛とその表象について、女性作家白薇（一八九四―一九八七）を中心に考察を試みたい。清朝末期、湖南省の保守的な家に生まれた白薇は十六歳で家父長の命に従って嫁いだ、姑の虐待にあつて婚家を脱出、転々としたのち遠く日本に留学した。八年間に及ぶ日本留学は創作者及び革命家としての彼女のキャリアに大きな影響を与えたが、自伝的長篇『悲劇生涯』（一九三六）が繰り返して塗り込めるように綴っているのは、彼女が全身全霊を傾けた恋と、その恋心を受け止めるでもなく拒絶するでもなく、振り回し続

けた男性の姿である。

一九二〇年代当時、「自由恋愛」は保守的な故郷湖南ではなく大正期の東京だったからこそ可能になったモダンな振る舞いだったが、その恋が叶えられないという現実には彼女は苛まれ続けた。ある人を愛するという昂奮と、愛する相手から愛されないという現実を、白薇はどのように表現したのだろうか。日本で出会った自由恋愛とその実践の表現について、同時期の男性作家とはどのような違いがあったのだろうか。

こうした疑問を考えるにあたって、本論では「だめんず」という比較的新しいことばを補助線として用いてみた。『悲劇生涯』に描かれたヒロインの恋人の行動は、今なら「モラルハラスメント」の一言に尽きると思われる。しかし恋愛自体が少数のインテリの特権的な精神的営為だと考えられていた年代、その恋愛の挫折に直面し、「愛されなかった自分」を描くことは相当な困難があったはずだ。真摯に愛した人に愛されないという傷を、彼女はどうか描いたのだろうか。

一 「だめんず」と「渣男」^{ジャマン}

「だめんず」という言葉は流行語の域を脱して既に定着している。『だめんず・うお〜か〜』はダメな男（だめんず）ばかりを渡り歩いてしまう女（だめんず・うお〜か〜）の体験談を紹介するノンフィクション漫画で、作者倉田真由美の大ヒット作となった。タイトルは、当時角川書店から発行されていた雑誌『Men's Walker』をもじって名付けられたものだが、現在ではこの雑誌を覚えている人のほうが少ないだろう。同作は二〇〇〇年六月から二〇一三

年四月まで『SPA!』に連載され、その後も長きにわたってアダプテーションの素材として大きなヒットを記録している。この過程で「だめな男」「だめんず」は日本語として浸透していった。

しかしながら、「だめんず」が表象するのは単なる「だめな男」ではない。彼が「だめんず」かどうかは社会的な失敗ではなく、あくまでも（交際相手の）女性とその女友達によって決められる。「だめ」のありようは暴力、浮気、虚言などいろいろだが、共通するのは交際相手への不誠実な態度である。逆に言えば、交際相手に不誠実な男は、どれほど世間的に成功していても「だめ」なのだ、ということがこの言葉によって可視化されたのだと言えるだろう。ちなみに『実用日本語表現辞典』は「主に女性から見て「ダメ」と評価したくなるような男性を指す語。ダメなメンズ。浪費家、浮気性、内弁慶で暴力的といった性向のある男を示す場合が多い」と定義している。（傍点は筆者による。以下同）

「だめんず」に対応する概念として、中国語には「渣男（ジャーナン）」というやはり新しい言葉がある（「渣」とはかす、くずのこと）。「渣男」を立項する紙の辞書は確認できていないが、中国最大の検索サイト『百度』は以下のような定義を下している。

通常、異性に対して不真面目な感情を持ち、相手の感情（特に恋愛感情）を弄ぶ男性のことを指す。いわゆる渣男は「悪い男」とは全く異なる概念。「悪い」とは政治や社会的な思想が正しくないことをいうが、「渣」とは人品の問題である。正しくはないが「渣」ではない男性もいれば、正しくないことはないが徹底して「渣」な男もいる。一般的には「渣男」とは極度に自分勝手に、搾取に長け、責任を負わず、他人の感情を振り回して喜ぶ男を指す。

「渣男」も「だめんず」と同じく「異性に対して」の態度から判断され、政治や社会的な思想の是非とは無関係と考えられている。「だめんず」と違って明確な語源を遡ることはできないが、おそらくはインターネットが普及した二〇一〇年代半ばから後半にかけて定着した用語のようだ。「だめんずネタ」は日本では漫画が発祥だが、中国では感情的に振り回され、弄ばれたと感じた女性が声を上げられるようになったプラットフォームはインターネット掲示板だったということかもしれない。

本論では、民国時期の恋愛描写について、こうした「だめんず」概念をかぶせていくのだが、「だめんず（渣男）」そのものよりも「愛されない女性」の自画像に焦点を当てたい。つまり、主な考察対象となるのは女性による女性の心理の描写である。

二 恋する女は気高いか

近代中国で恋愛の挫折が純文学のテーマとして描かれた背景には、恋愛感情そのものが称揚されるようになった過程と強いつながりがある。清朝末期から一九一五年に起こった新文化運動にかけて、日本経由で自由恋愛という思想が受容された。儒教思想を基盤とし、家の存続のために家父長による仲介婚が行われていた社会が、自由恋愛とそれに基づく婚姻を当然のものとして受け入れるようになった道のは決して滑らかなものではなかった。新文化運動から一九一九年の五四運動に続く五四新文化運動期には、強圧的な家父長制に抵抗する若いインテリが多く描かれている。たとえば、文学革命のイデオローグの一人であった胡適（一八九一—一九六二）が五四運動直前に書いた『終身

大事¹』は、結婚を反対されたヒロイン田亜梅が、恋人の陳との駆け落ちを決心するまでの経緯を描く戯曲である。因襲的な理由で両親に結婚を認めてもらえなかった亜梅は絶望して泣き崩れるが、そこに陳から手紙が届く。そこには「これは僕たち二人だけの問題で、他の人には関係のないことです。君は自分で決断すべきだ」と書かれていた。この言葉に啓発された亜梅は、「自分の意志で」陳と出ていくことを決める。

五四前後には、新思想に触れたヒロインが「自分の意志」を持って恋人を選ぶというストーリーが多く生まれたが、その多くは『終身大事』のように「恋愛とは自分で自分のありようを決定するものだ」と悟る²というプロットを含まれていた。

亜梅のように恋人によって啓蒙されるのではなく、自分自身で自分の感情を見定め、愛情を選ぶヒロインを描き始めたのはやはり女性だった。この時代の表現者として馮沅君（一九〇〇―一九七四）、廬隱（一八九九―一九三五）、凌叔華（一九〇〇―一九九〇）といった女性作家をあげることができるが、ここでは馮沅君のデビュー作「隔絶」³の一節を読んでみよう。この短篇は、親によって結婚を決められ、実家に監禁されたヒロインが、自死の覚悟を決めて遠く離れた恋人に書いたラブレターという体裁をとっている。

1 『新青年』六卷三号、一九一九年三月。

2 他に、たとえば魯迅「傷逝」（一九二五）をあげることができるだろう。濱田『少女中国』（岩波書店、二〇二二）における議論を参照。

3 一九二二年、『創造季刊』第二卷第二期。筆名淦女士。以下、注に説明を入れない限り、中国語テキストの翻訳は濱田による。

ああ、人の心は汚れきっていて、みな自分の賤しい心根でもって他人を推しはかろうとするのです。そうではなく、私たちのことを理解しさえすれば、誰もが私たちの愛情の純潔で神聖なことをただ羨ましがることでしょう。愛情のためには生命を犠牲にしても構わないとさえ考えている二人の男女が、十数日も一緒に過ごしながら、抱擁と接吻、愛の囁き以外には何の関係も持たなかったのですから……こんなこと、古今東西の愛の歴史の中でほとんどなかったことではないかしら？

馮沅君は、他の作品でも繰り返し「純潔で神聖な愛情」を説いている。輸入されてもない「自由恋愛」という概念の名譽を守るため、恋人たちは接吻と抱擁以外には「何の関係も持っていない」ことが強調された。さらに一九二〇年代の中国では、愛のためには命を投げ打つことも厭わないと考える男女が、性的なつながりを持たないまま結婚し、同居するという実践も行われた⁴。言い換えるならば、新時代の青年、とりわけ女性にとっては、「愛」の崇高性を確保するために「性」は徹底的に排除される必要があったということだ。つまり、「ラブ」という最先端の思想が至上の価値を持つものとして迎え入れられた一方で、「貞節」は前近代と同様に重視されたことになる。こうして、愛し合う男女が同じ屋根の下で過ごしながらも、接吻と抱擁以外のことはしないという「古今東西の愛の歴史の中でほとんどな」かった「快拳」が称揚されたのだが、こうした究極の精神的恋愛を描く小説は長くは続かなかった。

4 例えば、哲学者朱謙之（一八九九—一九七二）と楊沒累（一八九八—一九二八）が「友人として夫婦生活を続けた」例について丁玲が晩年に語っている。王増如『丁玲年譜長編』天津人民出版社、二〇〇六。

一九二〇年代はまた、（実践の可否は別にして）廃妾が盛んに論じられた時代⁵でもあった。法的にも、思想的にも、恋愛とは男女同等の関係の上に成り立つものであり、お互いへの感情は排外的で専一なものであるべきだという価値観が急速に広がった。こうした時代、新しい文学のヒロインたちは、至高の精神的な愛情を獲得したのちに結婚し、モノガマスでヘロセクシユアルでサステナブルな関係を構築する、というアクロバティックな夢を見たのである。その行程から一度足を踏み外してしまえば、「墮落」の烙印が押されることは必至だった。

三 大正恋愛スタイルと中国人留学生

日本に留学していた中国人青年たちによって文学グループの創造社が結成されたのは一九二一年のことである。この年、日本では厨川白村『近代の恋愛観』が出版されて瞬く間にベストセラーとなり、北村透谷から続く恋愛至上主義が世を席巻していた。さかのばれば明治時代から、「恋愛」は日本文学の主要なテーマにもなっていた。小杉天外『魔風恋風』（一九〇三）、田山花袋『蒲団』（一九〇七）などを挙げてみれば、共通点としてヒロインが女子学生であること、多くの場合彼女の「恋」は「墮落」に直結しており、いつときの放縦のために身を滅ぼすという結末が用意されていたことに気づく。先ほど述べたように、五四時期の中国文学ではストイックな「神聖恋愛」が強調され、「墮落した女学生」はほとんど登場しない。これは日本の女学生ものがたりとの大きな違いだと言えるだろう。

5 民国期の文学テクストと蓄廃妾の関係については鄭洲「娘が描く父の妾——琦君の散文を中心に——」（『野草』一〇三号、二〇一九年一〇月）を参照。

「墮落女学生」の物語が氾濫していた時代に日本で青春を過ごしたのが創造社の同人である。初期創立メンバーの中核には郭沫若（一八九二—一九七八）、郁達夫（一八九六—一九四五）、張資平（一八九三—一九五九）、成仿吾（一八九七—一九八四）、鄭伯奇（一八九五—一九七九）などがいた。彼らの出現が中国の若者に与えた衝撃について、当時中国国内にいた青年作家陳翔鶴（一九〇〇—一九六九）は次のように述べている。

「彼らは間違いなくSentimentalの一字を中国に紹介した。だからすでに目覚めた、あるいは半ば目覚めた中国知識青年の中に、強烈な反応を引き起こした。彼らは自らを「感傷主義者」、「弱者」、「零余者」と任じていた。そこで郭郁諸人の影響の下、それぞれが自己の旧社会、旧家庭、旧式の結婚、旧式の学校などに様々な怒りと反抗の叫び声を上げたのである。彼らの「形式」は脆弱で、退嬰的に見えるかも知れぬが、その本質は強靱で、積極的だった。」

郭（沫若）郁（達夫）諸人がもたらした“Sentimental”とは、初期創造社同人の創作に共通したキーワードだといえるだろう。センチメンタルな「弱者」としての告白は、しばしば大正期の日本で中国人留学生が女性に感じるコンプレックスに重ね合わされ、「赤裸々な自己告白」につながってゆくことになった。たとえば郁達夫について、郭沫若は「彼の大膽な自己暴露は、千年万年にわたって鎧兜の中に深く隠されてきた封建士大夫の虚偽にとっては嵐のような閃撃に他ならず、偽道学者、偽才子たちを震え上がらせ、さらには憤怒せしめた（中略）……達夫の自己暴露はもはや病態の域に達していた」という。

6 「郁達夫回憶瑣記」『文芸春秋副刊』一卷三期一九四七年三月、王自立・陳子善編『郁達夫研究資料・上』天津人民出版社、一九八二年。

7 「論郁達夫」一九四六年七月、『民主』週刊第四十一期。本稿で参照したテキストは『郭沫若全集・文学編』第二十卷、人

ここでは、郁達夫初期の代表作「沈淪」を例にとつて女性への眼差しを見てみよう。ものがたりはN市（名古屋）に留学中の中国人学生「彼」を主人公とする。彼は勉強に集中することもできなければ享楽に耽ることもできず、文学書をひもといても街中を歩いてもひたすら煩悶を感じている。以下、女学生と下宿屋の娘についての描写を順に見ていきたい。

まずは女学生について。

（……）向うから赤い袴をはいた女学生が二人やって来た。この辺の市外では、これまでついぞ女学生を見たことがなかったので、彼はこの二人の少女を見て息がつまりそうになった。（略）連れの日本人学生は三人とも一斉に彼女らに向つて「どこへ行くの？」と声をかけた。すると二人の女学生は、嬌声をあげて答えた。「知らないわ！」「知らないわ！」三人の日本人学生はどつと大声で笑い、いかにも愉快そうであつたが、彼だけは、自分が彼女らと言葉を交わしでもしたように恥しくなつて、匆々下宿へ駆けもどつた。（略）ああ、あの四つの生き生きした眼！あの四つの眼には、確かに驚きとともに喜びが含まれていた。しかしもう一度仔細に考えてみて、彼はまた急に叫び出した。「バカ！バカ！彼女らにたとい氣があつたところでお前と何の關係があるのだ？彼女らの送つた秋波は、あの三人の日本人の学生に送つたものではないか。ああ、ああ、彼女らはちゃんと知つ

民文学出版社、一九九二年。

8 創造社叢書第三種、泰東圖書局、一九二二年。

ていたのだ。俺が支那人だということを知っていたのだ。そうでなかったら、どうして俺の方を見ないものか。復讐だ、復讐だ。俺はきっと奴らに復讐してやるんだ。」

この引用からは、女学生たちは日本人学生にからかわれた時に「嬌声」をあげ、目に「喜び」をたたえたが、中国人である自分のことは見さげているに違いないと「彼」が考えたことを指摘しておきたい。

次は「彼」が密かに愛していたという下宿屋の娘について。主人公が彼女の入浴を覗きみるのは、おそらく「沈淪」中でもっとも知られた場面である。

(……) この下宿の湯殿は便所の隣なので、便所のガラス窓からのぞくと、湯殿の中が手にとるように見えた。彼は最初はちよつと見たらすぐ出ようと思ったのだが、一目見るやすつかり釘づけにされたように動くにも動けなくなってしまった。

あの雪白な双の乳房！

あのむっちりと白い太もも！

この全身の曲線！

息を殺して、じっとしばらく眺めているうちに、彼の顔面筋肉は一斉にぴりッぴりッと痙攣を起し、ますます9 以下、「沈淪」の引用は『現代中国文学全集一四』（河出書房、一九五五）収録の岡崎俊夫訳を用い、現代かなづかい、常用字に改めた。

激しくなって、思わず頭がこつんとガラス窓につきあたった。すると、湯気に包まれた、その素っ裸のイヴがなまめいた声で「だあれ？」といった。

何かと生活の世話をしてくれる下宿屋の娘は、女学生に比べて留学生にとつて接近しやすい身近な恋愛の対象であった（留学の年代は少し遡るが、周作人の妻は彼の東京の下宿で賄いをしていた羽太信子である¹⁰）。女学生に対してはその眼に、下宿屋の娘に対してはその肉体に彼の関心が注がれているのは、少女の属する階層の差を反映しているとも考えられるだろう。しかしながら、彼女たちはいずれも男性からの性的な眼差しに対して媚態を示している（「嬌声」「喜び」「なまめいた声」）。また、どうせ弱小国からやってきた自分は相手にされていまいだろうと憤激する「彼」の心理にも変わりはない（このパターンは、次に旅館の仲居を相手に繰り返され、「彼」に希死念慮を起こさせることになる）。こうした赤裸々な肉欲の告白は、陳翔鶴の証言のように、確かに中国の知識青年読者に強烈な反響を起こした。一方で、彼らの欲望の対象となっている女性たちはどうしても薄っぺらい印象を免れず、たとえば前述した馮沅君「隔絶」のヒロインとかかなりのずれがあるように思われる。このずれとは、果たして留学経験の有無によってもたらされたものののだろうか。ここにいよいよ、中国から日本に渡った女子留学生について考えてみたい。後年創造社の一員として活躍することになる白薇（一八九四—一九八七）が綴った東京での恋愛体験を追ってみよう。

10 中国人留学生と日本人の労働階級女性との恋愛については、喬聖寧「張資平の留学期の小説について——留日学生と恋愛を中心に」（神戸大学人文学研究科修士論文、二〇二二。未公開）を参考にした。

四 白薇という作家

白薇という作家は、旧道德による青年への圧力を告発した劇作『幽霊塔を出て（打出幽霊塔）』で知られている。¹¹ 本作は魯迅にも評価され、一九二八年、雑誌『奔流』の創刊号及び第二、第四期に掲載された。

白薇、幼名は黄碧珠、学名は黄彰。¹² 湖南省資興県に生まれた。父の黄晦は日本留学経験があり、同盟会にも参加していた革新派だったが、娘の教育については徹底的に封建的な姿勢を取った。白薇は九歳で婚約、一六歳で結婚させられたが、姑による執拗な虐待に耐えかね、母方の叔父の助力によってまず衡陽の湖南省立第三女子師範学校に、ついで長沙の第一女子師範学校に進学した。しかし卒業と同時に婚家に戻れという父からの圧力は凄まじく、卒業時には白薇の逃亡を防ぐため学校自体が封鎖されてしまった。彼女は同じ学校に学んでいた妹や同級生の協力のもと、校庭の隅にあった廃トイレの汲み取り口から脱出し、上海から船に乗って日本へ向かった。それが一九一八年、五四運動前年のことである。東京に到着してからはしばらく英国宣教師の家で住み込みの下女をしながら日本語を学んだ。やがて東京女子高等師範学校（現 お茶の水女子大学）に入学。しばらく田漢の妻易漱瑜と同居していたことがあり、その関係で田漢から英語を学び、日本人の師にも恵まれて、文学へ目を向けるようになった。一九二四年、福建からの留学生で東京高等師範学校（現 筑波大学）で学んでいた楊驥（一九〇〇—一九五七）と知り合い、彼に長期

11 邵迎建「革命・戦争と女性——白薇『打出幽霊塔』と張愛玲『傾城之恋』」参照。『越境する中国文学 新たな冒険を求めて』（東方書店、二〇一八）所収論文。

12 以下、白薇の伝記的事実については白舒榮・何由著『白薇評伝』（湖南人民出版社、一九八三年）に基づく。

間にわたって感情生活を左右されるようになる。以下、この恋のあらましを述べておく。

日本滞在中、同じ留学生の凌琴如に失恋して憔悴していた楊騷は、琴如の兄の璧如のはからいで白薇と知り合った。白薇が彼に好意を抱くようになるまで時間はかからなかったが、楊騷は白薇のほかに凌琴如と曖昧な関係が続ける一方で、カフェの日本人女給とも関係を持ち、そうした行動を白薇に隠そうとしない。その度に深く傷つきながらも白薇は彼に執着し続けたが、楊騷は彼女に誠実に向かいあおうとしなかった。

一九二五年、言葉をのこさず楊騷が中国に帰国したと知った彼女は、予告なく彼を訪ねて驚かせ、愛を確認しようと考えた。杭州西湖畔の寄寓先に突然現れた白薇を楊騷は歓迎しなかった。彼が感じたのは愛情よりむしろ恐怖に近かったようである。『悲劇生涯』¹³では、追い縋る碧葦（白薇）に展（楊騷）は以下のような言葉を投げつけたと書かれている。

僕が君を愛していないって？……ずいぶん前に言ったよね、君は僕の最も理想的な女性かもしれない、君は僕の最愛の女性だ！でも僕の狂騒的な性は、多くの妖姫艶婦を必要としているんだ。僕は、まだこれから百人の女性を経験したい。そうして疲れ果て、病室から運び出された柳のように憔悴しきった時、僕は永遠に君の胸の中に安らぐだろう。

彼はその後また予告なく故郷の漳州に、ついでシンガポールに渡った。彼が日本を出たのも故郷へ渡ったのも、そ

13 『悲劇生涯』、文学出版社、一九三六年。本論で参照したテキストは『白薇文集』第一集及び第二集（湖南人民出版社、二〇一四年所収）。

して南洋に行ったのも自分から逃げるためだったと気づいた白薇は、赤貧の中なんとか劇作を執筆し、その稿料で日本に戻る。

漳州へ、そしてシンガポールへ、白薇は想いのたけを綴ったラブレターを楊騷に送り続けている。白薇自身は一九二六年に日本から帰国、武昌で日本語通訳として働いたのちに上海に移動した。その翌年、楊騷はシンガポールから帰国し、改めて白薇に愛を打ち明けている。しかし上海で同居を始めたすぐ後、白薇は自分が淋病に感染したことを知った。楊騷がシンガポールの娼館から運んできた淋菌は、宿痼となつて白薇を苦しめ続けたが、この時も彼女は楊騷を許すことを選んでいる。転機となつたのは、一九二八年、二人で決めた結婚式の当日に楊騷が姿を現さなかった時であった。楊騷は何度も白薇を裏切つては彼女のもとに戻るといふことを繰り返し、その都度白薇は彼を受け入れてきたのだが、万事手はずを整え、賓客も揃っていた結婚式から楊騷が逃げたことで、白薇はとうとう彼を自分の人生から退場させることを考えはじめた。一九三三年、白薇は楊騷との往復書簡集『昨夜』を刊行している。自伝的長篇『悲劇生涯』と共に、彼女が自らの感情を整理するために公刊したのだと考えられるだろう。

一時は宣教師の家で下働きをし、窮した時にはカフェの女給になることも考えた（しかし性的な目で値踏みさ



1928年の楊騷と白薇。結婚式をひかえて撮ったもの。『白薇評伝』より

れたためにその考えを放棄した」という白薇は、先ほどの郁達夫「沈淪」に従ってみると「女学生」と「女中」という二つの身分を兼ね備えた存在であった。旧式結婚によって痛めつけられた彼女が主体的に選り取った恋人は、彼女にどのような喜びと痛みを与えたのだろうか。

五 東京だめラブストーリー

『悲劇生涯』に描かれた人間関係は交錯しているが、前半ではヒロイン碧葦（白薇をモデルとする）と展（楊騷をモデルとする）を中心とした、東京在住の中国人留学生グループによる恋愛模様が繰り広げられる。熱愛していた恋人紅（凌琴如をモデルとする）に去られて自暴自棄になっていた展をみるにみかねた紅の兄の琵琶爾（凌璧如をモデルとする）とその婚約者婉貞（張成濤をモデルとする）は、彼に新しい恋人を紹介するに如くはないと考え、平素から仲間うちで「怪物」と呼ばれていた風変わりな女性、碧葦を紹介することを思い立つ。展より六つ年長の碧葦は、美貌に恵まれていたものの、国内で結婚を経験していたこと、父と義絶しているため常にぎりぎりの貧困状態にあったこと、そして何事につけ真面目に打ち込みすぎる性格のため、よく周りの笑いものになっていた。二人が出会ったのち、碧葦はあつという間に陰鬱で自滅型の美形詩人展に惹かれるようになる。「怪物」碧葦が自分に夢中になっていることを知ってか知らずか、展は常に別の女性の影をちらつかせ、ややもすれば元の恋人紅とのよりを戻そうとしつつ、碧葦とも完全に切れようとはしない。典型的な「だめんず」の徹底しただめっぷりが約四十万字にわたって綴られていくのだが、まずは二人の関係の変化を表すのに効果的に用いられているキスの場面を拾い上げてみよう。

本書で最初に目を引く接吻のシーンは、男女ではなく展と琵琶という男性同士で交わされる。以下は、琵琶と婉貞が、紅に去られてすさみきつた生活を送る展に胸を痛める場面である。

長々と嘆息すると、彼（引用者注、琵琶）は自分の妹が展の感情を弄んだことに憤りを禁じ得ず、悲痛な涙を止めることができなかった。彼の嘆きは展を感動させ、刺激しただけでなく、気の強い婉貞もまた目がつんとしてまぶたが湿るのを感じた。

緊張した沈黙が走り、展は自嘲の面持ちで自分の白髪をいじっている。

愛おしく思う気持ちに琵琶の血にたぎり、彼は展を抱き寄せると、続け様に狂おしく接吻した。

「同性愛ね！」婉貞は拍手して褒め称えた。

皆がこの友情の素晴らしさを意識した。気高い気宇が二人の青年の顔に現れ、愉快な心情は涼風のように彼らの肺腑を吹き抜け、活気が展の心に漲った。

二人のすぐそばで琵琶の婚約者である婉貞が称賛していることから、この後すぐ展の新しい恋の相手として碧葦が推薦されていることから考えても、この「同性愛ね！」がロマンチックな感情を指すとは思われない。登場人物たちが、「男性同士は友情を確かめ合う手段として接吻するもの」という認識を持っていたことは、碧葦と共に散歩をしていた展が次のように考える場面からも確かめられる。

「ああ、君が男だったら、君が僕の友達だったら、毎日一緒にいられるのに！」

展は無邪気に葦を追いかけてそう言い、真珠のような歯並びを見せて微笑んだ。燃え立つ情熱に任せ、いつも琵琶爾にしているように葦をしつかりと抱きすくめ、心ゆくまでキスすることができないのが歯がゆかった。相手が女性であるために、彼は黙ったままぼうつとしていた。

宋新亜は、日本の旧制高校やそれに相当する学校組織における若い男性同士独特の「友情」は日本に留学していた中国人学生にとっても身近なものであったとして、郁達夫「茫茫夜」中の同性愛的な描写を「調和手段としての友情」として読んでいる。¹⁴ 同じく大正期に日本で学んだ白薇のテクストにも、日本風俗ガイドという側面があったことは間違いないだろう。日本では若い男性同士の独特の「友情」は抱擁や接吻を伴うものであり、それはロマンチックな愛情としてではなく、調和的な友情なのだということが、中国人留学生の間で了解されていたということだ。風俗ガイドの例をもう一つ挙げておきたい。展が「蚕カラ」を気取りながら碧葦に求愛する場面である。

展はばさばさとマントを揺らし、黒いラシャに白いリボンの縁取りをつけ、さらに緞子のリボンを蝶結びにした変な帽子をかぶり、大久保の婦人Homeまで葦に会いにきた（中略）。

「とめどもなく君を愛している。君は僕がこの世で探し当てた最も理想の女性だよ。葦、信じてくれ、僕は言

14 「記憶としての旧制高校…郁達夫「茫茫夜」の同性愛論争をめぐる」『野草』一〇二号、二〇一九年三月

い尽くせないほど君を愛している！」

彼は灌木の垣根に沿って歩きながら言った。

「あなたこそ、私が見てきた中で最も純潔な、俗っぽくない男のひとつだわ。流れ星のように美しく光っているひと」
「そうだ、君が他の女と違うのは、君が清純な光と汚れない魂を持っているからだ。僕たちは愛し合おう。この不思議な光の中で愛し合い、生活し、前進するんだ！」

彼は狂ったようにマントを翻して葦を包み込むと、垣根に沿って大股に前に進んだ。葦は籠から抜け出す小鳥のように彼の衣服からさっと外に出ると、勇敢な様子で展に微笑みかけた。「いつまでも輝く青春の光のなかにいましょう！」

言うまでもなく、黒いマントと白線帽とは旧制高校（とそれに準じる教育機関）に通うエリートのアイコンである。『悲劇生涯』が執筆されたのは一九三五年のことで、白薇が日本から帰国してから九年、楊騷と決定的に別れてから一年が経っていた。一九二四年から三四年までに及ぶ二人の交際の歴史は、楊騷が白薇を冷たくあしらったかと思うとまた言い寄り、白薇が彼に尽くせばまた突き放されるという繰り返しだったようだが（そして『悲劇生涯』はその過程をひたすら感情的に再現するテキストである）、男子学生同士の接吻、マントと帽子、畳敷の下宿や東京の街角で繰り広げられる恋の駆け引きなどは、異国での生活体験ガイドとしての記録的な意味を持つほかに、二人が出会った青春の光芒を蘇らせる小道具として作用していると言える。マントと白線帽子は、郁達夫が描いた日本の女の風俗——纏足していない足、歩けば露わになるふくらはぎ、帯一本だけで繋ぎ止められている衣服——と対をなして

いるとも考えられるだろう。

六　だめな愛のだめなゆくえ

ここで、二節で引用した馮沅君「隔絶」をもう一度振り返ってみたい。ヒロインが恋人に送った手紙には「愛情のためには生命を犠牲にしても構わないとさえ考えている二人の男女が、十数日も一緒に過ごしながら、抱擁と接吻、愛の囁き以外には何の関係も持たなかった」ことが強調されていた。彼女は両親に見知らぬ男性との結婚を強要されており、もはや死ぬしかないと考えている。そして死の間際に立っても、彼女はなお愛する人と「何の（肉体的）関係も持たなかった」清い交際であったことを誇るのだ。これは一九二〇年代初期を代表する恋愛観と言えるだろう。肉体的に触れ合わないことこそ、愛の崇高さ、純粋さを証明する行為なのである（しかしここでも、「接吻」は近代的かつ清純な愛の行為とされている）。

しかし、碧葦（白薇）にはこうした「崇高な恋愛」を実践することはできなかった。九歳で婚約し、一六歳で嫁がされた彼女は、留学生の間でしばしば「汚れている女」「純潔ではない女」として軽蔑されていた。彼女はすでに「新式の精神恋愛」を享受する資格を奪われていたのである。

そんな彼女が、初めて展とキスをしたのは東京郊外で散歩をしていた際、急な雨にあったときだった。先述の「調和的な友情」と異なり、明らかにロマンチックな感情の発露としてキスされた時、「新式の恋愛」からは遠ざかろうと自分の感情に封をしていた碧葦の心が音をたてて動き始める。

彼女はすでに自分の感情を抑制できず、酔いしれていた。二人の愛し合う異性が初めて密着して抱擁を交わした時、彼女はただ喜びを貪ろうとするだけで、理性は後ろに振り捨ててしまったのだ。彼女はもはや気高くとりますますことはできなかった。恋愛を封じていた鉄の壁は、愛の神の金の矢で射抜かれてしまったから。彼女はもはや気高くとりますますことはできず、常人の恋など超越しているという態度をとることはできなかった。彼女はぐつたりと抵抗もせず、展の美しく熱い唇が彼女の赤い華奢な唇に押し当てられるままに任せていた。熱く痺れ、快感がかけめぐり、蜜のような火に体が溶ける。悦楽の中に、天地の景色は全て消えてしまった。

周りの女学生のようにには恋愛などできない、と思い定めていた碧葦はここで愛情を自覚し、展に唇を委ねた。このキスシーンは二人の間の感情が近代的なロマンチッククラブとして自覚されたことを饒舌に語る。彼女は「初めて真実の愛情を知った。柔らかく青々とした感情の苗が、空虚だった心の中に根を下ろしていくのを」感じる。しかしながら、展の前の恋人、紅（凌琴如）は二人の仲睦まじい様子を目にとると、おもしろからぬ様子で碧葦に告げる。「展って本当にKissが好きよねえ、一度始めたなら何十回も続けるんだもの。彼ってKissが好きすぎると思わない？」

碧葦は、最初のキスによって今まで封じていたロマンチックな感情を不可逆的に溢れさせたのだったが、紅のこの言葉はキスという行為の曖昧性を彼女に突きつけることになった。確かに、展は「友情の証」として比爾にキスしていたのだった。とすれば、「キスが好きすぎる」彼が碧葦と交わしたキスは、碧葦がときめいたような唯一無二の恋愛感情から生まれたものではないかもしれない——。その予感的中し、二人の関係は高まることも切れることもな

く、碧葦を傷つけてゆくことになる。

碧葦と展、二人の恋はほぼ現実の白薇と楊騒の軌跡をたどって展開する。碧葦にとっては展との愛情は唯一無二の絶対的なものだが、展にとつての碧葦は最後までそうはならなかった。郁達夫「沈淪」の複数の女性に惹かれる留学生のように、展は自分を愛する女性、自分が惹かれる女性の間を落ち着かなく動き回り、そうした自分を碧葦にも隠そうとしない。数年後に二人が上海で同棲を始め、初めて結ばれた時の描写はさらに皮肉に満ちている。

本当に夢のようだった。彼女は生まれて初めて甘美な人生というものを味わい、彼らは死に達するような喜びを味わった。翌日、ぐったりしていた二人が体を無理に起こしたとき、葦はまだうつとりしたままどうしても彼と離れられなかった。彼女は喜びのあまり花を咲かせた——一生に一回しか現れない優曇華。一生に一度の優曇華を。

碧葦には結婚歴があつたが、展との関係で初めて「靈肉一致」の幸福を知つたのだった。愛する人と暮らす喜びは、以下のような濃やかな描写で表現されている。

彼がこんなに快活で軽やかで、愉快で活発な人とは思っていなかった。全身が楽しさと喜びに満ち、部屋をいつたり来たりしながらずっと歌い続けている。にこやかで、蠱惑的で、深い海のような情緒を湛えたまなざし。

昼は快活に共に働き、夜は慈しみ合いながら同じ夢を見るといふ生活は、近代的な自由恋愛が目指した理想の男女

関係のはずだった。しかし、碧葦はすぐに自分の身体に異変を感じるようになる。重度の淋病をうつされた彼女は日常生活もままならなくなり、貧困のために治療も思うように進められない。そして日常生活がうまく回らなくなったとき、苛立つのは病気をうつした展であり、不機嫌を隠そうとしない彼を碧葦が必死になだめるといふいびつな力関係が出来上がっていく。興味深いことに、新郎が結婚式に現れなかったという事件は『悲劇生涯』には書かれていない。碧葦が展に最終的に幻滅するのは、展の浮気性、金銭感覚のなさ、繰り返される嘘ではなく、彼の顔色をうかがっているうちに仕事ができなくなってしまった自分に気づいたからであった。

碧葦は考える。「彼と一緒に住み始めてからというもの、仕事と努力に対して、私は足を繋がれた囚人のようになってしまった。なのに彼は、春風に乗った美しい羽の鳥のようだったのだ」。もっと仕事をさせてほしい、そのためには別居したほうがいい、と提案する碧葦に、展は「そんなことなんて僕への侮辱かい？まさか僕が君を食わせていけないとでも？」と立腹する。自分の創作に集中して打ち込みたいという碧葦をよそに、展は「女がいてこそ男の生活は充実するものなんだねえ」と屈託がないのだ。この時に碧葦が感じた絶望は、彼が複数の女性と関係を結んでいたと知ったときよりなお大きい。彼女が追い求めてきた身を焦がすようなロマンチッククラブは、彼女自身を閉じ込める檻に他ならなかったのだ。

二人の関係が壊れてしまったのを示唆するのもまたキスの描写である。

展はまたもやひっきりなしに葦に「情愛」、「人生」を求め、隙についてはむりやりキスしようとしてきた。これで葦の怒りはまた燃え上がった。片手で彼を押し退けると、驚愕した葦は青春を失って麻痺した唇をさすり、

悲しみを感じた。彼女の青春を奪って賠償していないというのに、まだ青春を求めてくる彼を恨んだ。

碧葦のロマンチックなラブストーリーはめくるめくキスシーンで始まったが、同棲生活の末にたどり着いたのは、そのキス自体が青春の搾取だという発見だったのである。

七 だめな私を見つめるために

四十万字に及ぶ大長篇『悲劇生涯』は、一九二四年に碧葦と展が出会ってから別れるまでのほぼ十年を描く。北伐や第一次上海事変などの重大事件はわずかに触れられるだけで、大きな転機となつたはずの魯迅との出会いも全く重きを置かれていない。大部分を占めるのは展の言葉や振る舞い、表情に一喜一憂して涙を流すヒロインの行動と心理である。女性作家の関露（一九〇七—一九八二）は本作を以下のように評した。「彼女のこの作品は、愛情ばかりを題材とし、そのもつれについて叙述していて、まるで愛情生活こそが生活の大部分とでもいうかのようだ。社会生活や思想は時折挟まれているだけである。こうした愛情だけに重点を置く物語は、一般の女性ならまだいいだろう。しかし白薇女士は女性の中でも抗争の前線に立ち、社会工作に努力しているのに」¹⁵。関露は、『悲劇生涯』は大切なこと——思想と社会——と大切ではないこと——個人的な愛情——との比重があべこべであるという。多くの評論家が

15 前掲『白薇評伝』一四八頁による。

同じ欠点を指摘してきた。ましてや、『悲劇生涯』は恋愛小説としてもストーリーの起伏にかけ、プロットに混乱が多く、冗長の嫌いを免れない。

しかし、だからこそ、白薇自身が自序で述べているように『悲劇生涯』は「事実のうちの真実、真実、本当の真実を表現したもの」となった。客観的な事実であるかどうかはともかく、十年にわたる苦しい恋愛を彼女の心のままに記録しなければ、白薇は前に進むことができなかった、ということではないだろうか。父によって強制的に結婚させられ、姑と夫に虐待されたのは彼女が一生遺憾としたところだった。しかし旧式結婚は、それがどんなに悲惨なものであっても彼女自身の責任ではない。彼女は自分自身に鞭打つことなく運命を嘆き、両親の無理解や姑や夫の頑迷さをなじることができた。しかし自由恋愛は全く違うものだ。自分で選んだ相手の甘い言葉と抱擁に蕩け、その結果傷ついたことについて、彼女は他の誰を恨むこともできない。

一九二八年、丁玲は『莎菲女士の日記』¹⁶で「浅薄極まる男（凌吉士）の正体を知りながらなお彼に欲望するヒロイン」を描き切っている。莎菲が凌吉士にキスを許し、「潤んだ柔らかい熱いものが覆いかぶさった瞬間」に目を大きく見開き、「勝った」と思うラストシーンは文壇に大きな衝撃を与えた。凌吉士に心惹かれながらもキスした瞬間に正気を取り戻した莎菲は、彼を蔑み自分を蔑みながらも一人で死んでいくことを決める。莎菲は大胆で潔く、カタルシスを与えるヒロインだ。

碧葦は、「凌吉士を受け入れてしまった莎菲」とも言えるだろう。自由恋愛という新思潮は、旧式の結婚を忌避し、

愛を傾ける対象に焦がれる少女たちにとって抵抗しがたい魅力を持っていた。それが馮沅君「隔絶」のように「気高い精神的恋愛」で止まっているうちは、彼女たちは志高い新女性としてのプライドを失わずにすむ。しかし現実の愛情生活は多くの碧葦を生み出したのではないだろうか。自由恋愛が素晴らしいという思想を学んだ後、恋愛小説ブームに湧く日本に留学した少女たちにとって、恋することに、恋する相手と一体化することに焦がれるのはごく普通のことだっただろう。その恋がもたらす傷が生々しく情緒的に描かれているという意味で、『悲劇生涯』は文学的価値はさておき、白薇が言うように綺麗ごとではない「真実の真実」を伝えていると言える。

＊ 本稿は、二〇二二年三月に神戸大学で行われたワークショップ『異郷に学び、異郷を書く…華人女性の留学体験』で行った報告をもとにまとめた。報告に対して貴重な意見や資料を提供してくださった皆さんに感謝申し上げます。また、本稿は科研費基盤研究（B）「方法としてのサイノフォン——華語語系文学史構築のための基礎的研究」19H01236による成果の一部である。